

岩村の歴史シリーズ(一)



写真1 (仏橋)

仏橋旧長岡村西山の辺りから、その南を流れる舟入川を渡つて、南北に大変長い包末部落のほぼ東端を、南北に貫通し永田へと通じている市道がある。この道は昔は「塩の道」といわれ、前浜の海岸で採れる塩を北部山間集落に運ぶ道であったとも言われる。

しかしこの橋は「仏橋」と呼ばれ、流れる川はこの橋より上流を井流本川(ゆるもとがわ)といい、この橋より下流を仏川と云って何かいわくありげである。さて、岩村の歴史シリーズ(一)で述べた津野神社について、ここで思い起こして欲しいが簡単に振り返ってみよう。元親は天生十四年戸次川の戦いで長男信親を失い、跡継ぎを次男三男を飛び越して溺愛していた四男盛親にしたかった。次男親和は、相続を巡る紛争を苦しめて病死、三男親忠は家督を没収され岩村の孝山寺に幽閉された。長宗我部を継いだ盛親は、秀吉、元親没後の慶長五年(一六〇〇)の徳川と豊臣の天下分け目の戦い(関が原の戦い)で、西軍に属して敗れた。

いたかは思い出せないがこのよな話の記憶がある。この井川本流の上流、東金地の中島千浪さん宅の西の岩村ふれあいセンターの南側から包末に通じている市道に架かる橋(欄干があるわけがなく橋の名前もわからない)を確か「なみだ橋」というと聞いた。

これは親忠に切腹を命じた盛親からの使者が、切腹を見届け西方に帰る途中、翻意した盛親が「その儀におよばず」(切腹の必要なし)として送った使者とこの橋の上でばった出会い、今一步の遅れで取り返しのがなくなつた事を嘆いて、手を取り合つて泣いた。このことから「なみだ橋」と言われるようになったとのことである。

盛親は、徳川家康に詫びを入れ土佐一国安堵を狙い上京しようとしたが、その前に権臣久武内蔵助のたくらみもあり、親忠に腹を切らすことになった。盛親からの切腹を命じる使者が切腹を見届けて帰る途次、検死のため西方から来ていた使者とこの橋の上でばったり出会った。

包末城跡(写真2) 久礼田から浜改田までの南北の農免道路(これは包末の辺りから浜改田までの南北一直線は、旧香美郡と長岡郡の境界である)と東西の農免道路の交差点から北に百メートル余り行った東側に、包末城跡といわれる土塁がある。

太平洋戦争も、既に負色の見え始めた昭和十九年十月十四日、高知海軍航空隊の練習機二機が訓練中接触事故を起こし、この場所の北東約五十メートルの所と、もう一機は松本部落の北西部の2箇所に墜落し、乗っていた十二名の若者が全員死亡という痛ましいことが起こった。

室戸岬 高知農業学校 足摺岬の三点を結ぶ三角形が訓練空域であったようであるが、両機とも僅かにコースを外れ、見張り不十分もあつたようである。



写真2 (包末城後)

写真3 (慰霊碑)